

ヒポクラテス『誓い』を読む(1)

川 田 殖

ヒポクラテスの『誓い』は、それが医学の父の名を冠せられていることもあって、今でも欧米の医学校の卒業式などで読み上げられている所もあるほど広く行きわたった、医者倫理訓とされてきた。しかしこれをこんにちの状況の中で自分たちの言葉として読むにはいろいろ距離があるというのがわれわれの実感ではないだろうか。欧米には欧米の伝統があるのだから、それはそれでよいとして、われわれとしてはこれをどう理解したらよいか。このことを少しばかり考えてみたい。とはいえこの『誓い』には古来いろいろな問題が含まれていて、これらを無視して一足飛びに結論を出すというわけには行かない。そのためには、写本の伝承、刊本の吟味、本文の確定、逐語訳の試み、言語的特徴、などのテキスト上の問題をひと通り考えた上で、成立年代の見通しをつけ、思想内容の検討に入ることが順序であろう。その際には医学、宗教、倫理、さらには社会史的背景の考察もあわせて必要となろう。今回はさし当りテキスト上の問題を主として考察することにした。

キーワード：ヒポクラテス、誓い、医学倫理

1. 写本

ヒポクラテス文書の手写本(MSS)は、その実用的性格からか、詩人や哲学者たちのそれのように珍重されず、前3世紀のアレクサンドリアの文献学の時代においても、十分な校訂がされなかった。そのため本文の異った読み方が多く、中には自由に訂正されたり、欄外の書き込みがまぎれこんだりしてその整理は容易ではない。しかしともかく19世紀以来の研究の結果、中でも重要な古写本は次のようなものとされる。(記号、番号は下記刊本の冒頭にあげるリットレによる)。

1. フィレンツェ写本(Laurentianus)―メディチ家(ことにロレンツォ・ディ・メディチ)所蔵のもの。今はバチカン図書館、イタリア国立中央図書館その他各地に散在。

B (74, 10世紀のもの、以下同様)

2. ウィーン写本(Vindobonensis)―オーストリア帝

室図書館その他のもの

O (219, 10世紀)

3. ベネチア写本(Venetius)―ベネチアのサンマルコ教会附属図書館所蔵のもの。(Marcianus)。

N (269, 10世紀)

4. バチカン写本(Vaticanus)―ローマの教皇庁図書館所蔵のもの。

V (276, 12世紀)

R (277, 14世紀)

5. パリ写本(Parisinus)―フランス国立図書館、パリ大学図書館その他に所蔵される古写本で、中でも

A (2253, 11世紀)

C (2143, 10世紀)

D (2254, 14世紀)

E (2255, 14世紀) などが重要とされる。

以上の写本のうち『誓い』を完全に含むものは3のベネチア写本と4のバチカン写本(上記V)で、後代もこの二種の写本を中心として本文が校訂され、のちの写本の読みをも勘案して種々の刊本が出されている。その重要なものは次の通り。

2. 19世紀以来の刊行本

19世紀以来の『誓い』を含むヒポクラテス文書の重要な刊本は次の五種である。

1. リットレ版

Oeuvres Complètes d'Hippocrate

par E. Littré, Paris, 10 vol, 1839-61

希仏対訳, 詳細な校訂記事を含み、現在なお有用

2. エルメリウス版

Hippocratis et Aliorum medicorum veterum

reliquae ed. F. Z. Ermerius, 1859-64

注記が詳細ですぐれている。

3. キューレヴァイン版

Hippocratis opera quae gerunter omnia ed. H.

Kühlewein, 1894

トイプナー古典叢書に含まれている。

4. ジョーンズ版

Hippocrates ed. and tr. by W. T. S. Jones

and E. T. Withington 4 vols., 1923-31

ロエブ古典叢書に含まれている。希英対訳。

5. ハイベルク版

Hippocratis opera ed. I. L. Heiberg, 1927

ギリシア医学者集成(Corpus medicorum Graecorum)

に含まれている。

このうち小生の手にした校訂本は1のリットレ本、3のキューレヴァイン本、4のジョーンズ本、5のハイベルク本の四種であるが、これらを比較してみると、1はM, Vの二写本をできるだけ忠実に再現しようとしていることがうかがわれる。しかしイオニア方言の古形にこだわりすぎて、読みにくい箇所が若干ある。4はこれと対照的に読みやすさを狙った校訂で、アッティカ方言を中心としたコイナー形を好んで採用している。3と5はC写本を加味しながら1と4の中間を狙った本文で、3はやや4に近く、5はどちらかといえば1に近い。この3と5二つの本文校訂が妥当とも思われるが、しかし若干の点で改善の余地があると思われる。その点を加味した小生の校訂の試みを次に掲げておこう。

3. 本文校訂 (ギリシア文字をローマ字、長音をアクセント記号で示す。)

Omnymi Apollóna iétron kai Asklépion kai
Hygeian kai Panakeian kai theous pantas te
kai pásas, histras poieumenos, epitelea
poiésein kata dynamin kai krisin emén horkon
tonde kai xyngraphén ténde, hegesasthai men 5
ton didaxanta me tén technén tautén isa
genetéisin emoisi kai biou koinósasthai, kai
chreón chreízonti metadosin poiésasthai, kai
genos to ex autou adelphois ison epikrineein
arresi, kai didaxein tén technén tautén, én 10
chreízosi manthanein, aneu misthou kai xyngra-
phés, parangeliés te kai akroésios kai tés loi-
pés hapasés mathésios metadosin poiésasthai
hyiosi te emoisi kai toisi tou eme didaxantos,
kai mathétai xi xyngegrammenois te kai horkis- 15
menois nomói iétrikoi, allói de oudeni.

Diaitémasi te chrésomai ep'ópheleiéi kamnon-
tón kata dynamin kai krisin emén, epi délései
de kai adikiéi eirxein. Ou dósó de oude pharma-
kon oudeni aithétheis thanasimon, oude hyphé- 20
gésomai xymboulíen toiénde, homoiós de oude
gynaiki pesson phthorion dósó. Hagnos de kai
hosíós diaterésó bion ton emon kai technén tén
emén. Ou temeó de oude mén lithiéntas,
ekchórésó de ergatéisin andrasi prexios tésde. 25
Es oikias de hokosan an esió, eseleusomai
ep'ópheleiéi kamnontón, ektos eón passes
adikiés hekousiés kai phthoriés, tés te allés kai
aphrodisión ergón epi te gynaikeión sómatón
kai andróiön, eleutherón te kai doulón. Ha 30
d'an en therapeiéi é idó é akousó é kai aneu
therapeiés kata bion anthrópón, ha mé chré-
pote eklaleesthai exó, sigésomai, arreta
hégeumenos einai ta toiauta.

Horkon men oun moi tonde epitelea poieonti 35
kai mé xyncheonti eié epaurasthai kai biou kai
technés doxazomenói para pásin anthrópóis es
ton aiei chronon, parabainonti de kai epiorko-
unti, tanantia touteón.

J : Jones H : Heiberg

- 1 omnymi] omonuó KH
- 5 xyngraphén] syngraphén J
hegesasthai] hegesesthai J
men] te H
- 7 emoisi] emoisin H:emois J
koinósasthai] koinósesthai J
- 8 poiésasthai] poiésesthai J
- 9 autou] óuteou L
adelpois] adelpheois H
epikrineein] epikrinein J
- 10 én] hén J
- 11 xyngraphés] syngraphés J
- 13 poiésasthai] poiésesthai J
- 14 hyiosi] hyios J
emoisi] emois] J
toisi] tois J
- 15 mathetaisi] mathetheisi K, mathethési J
xyngegrammenois] syngegrammenois L
- 23 ton] om.H tén] om. H
- 30 andróiōn] andreion K
- 33 eklaleesthai] eklaleisthai] J
- 36 xyncheonti] syncheonti J
- 38 aiei]aei K
epiorkounti] epiorkeonti] J

4. 逐語試訳

いくつかの段落に分け番号をつけて試訳してみよう。

[]は補訳。

誓い (Horkos)

A. 私は誓約します(Omnymi)、医者としての(iétron)アポロン(Apollón)と(kai)アスクレピオス(Asklépion)と(kai)ヒュゲイア(Hygeian)と(kai)パナケイア(Panakeian)、および(kai)すべての男と女の(pantas te kai pásas,)神々(theous)にかけ、[これらの神々を]証人(histras)として(poieumenos,)、私の(emen)力(dynamin)と(kai)判断(krisin)の限りをつくして(kata)、以下の(tonde)誓い(horkon)と(kai)以下の(ténde)誓約簡條書き(xyngraphén)を完全に(epiteleá)実行す

るであろうことを(poiésein)——(以下「すなわち」となって誓いの内容が「……することを」という不定法をとった名詞節の形で主文に含まれ、長い複文をなしているが、ここでは簡単のため「……します」と訳すことにする。)——まず(men)私に(me)この(tautén)技術を(tén technén)教えた方を(ton didaxanta)私の(emoisi)肉親(genetéisin)同様と(isa)心得ます(hegesasthai)。また(kai)暮らしを(biou)共にします(koinósasthai,)。そして(kai)必要に応じて(chréizonti)金品を(chreón)分け与え(metadosin)ます(poiésasthai)。また(kai)この方に由来する一族を(genos to ex autou)自分の男きょうだいたち(adelpheois arresi)同様(ison)重んじます(epikrineein)。そして(kai)この(tautén)技術を(tén technén)学ぶことを(manthanein)彼らが求める(chreizósi)場合にはいつでも(én)、代価(misthou)や(kai)誓約簡條書(xyngraphés)なしで(aneu)[医師としての]心得(parangelíes)や(te kai)講義(akroésios)や(kai)その他(tés loipés)あらゆる(hapasés)知識を(mathésios)伝授(metadosin)します(poiésasthai)。
[これらを教えるのは]私の(emoisi)息子たち(hyiosi)と(te kai)私を教えた方の子息がた(toisi tou eme didaxantos)にですが、また(kai)[医者]の]きまりによって(nomói iétrikoi) 誓約簡條に署名させられ(xyngegrammenois)かつ(te kai)誓わしめられた(horkismenoi)弟子たちにも(mathetaisi)[同様にいたします]、しかし(de)これ以外の他の(allói)何びとも(oudení)[伝授いたしません]

B. (1)また(te)私の(emen)力(dynamin)と(kai)判断(krisin)の限りをつくして(kata)患者たちの(kamnon-ton)ためになるようにと(ep' ópheleiá)食養生法(diaitémasi)を施します(chrésomai)が(de)健康に有害かつ不当となるものは(epi délesi kai adikiei)断固として慎しみます(eirxein)。 (2)また(de)たとえ頼まれても(aitétheis)誰にも(oudení)決して(oude)毒薬(pharmakon thanasimon)を与えません(ou dósó)し、そのような(toiéndē)相談(xymboulíen)にも決して(oude)乗りません(hyphégésomai)。 (3)また(de)同様(homoiós)婦人に(gynaiki)有害な(phthorion)ベッサリー(墮胎用器具)を(possōn)与えません(oude dósó)。 (4)そして(de kai)私の(ton emon)生活(bion)と(kai)私の(tén emén)技術(technén)を純潔に(hagnós)かつ(kai)敬虔に(hosiós)保ち続けます(diaterésó)。 (5)また(de)結

石病患者には(lithíontas,)決して(oude)これに(mén)手術を施すことをしない(ou temeó)で(de)、その(tésde)仕事の(praxios)専門職に(ergateisin andrasi)委せまず(ekchóresó)。 (6)また(de)どんな人の(hokosan)家を(en oikias)訪問する(esió)際にも(an)、患者たちの(kamnontón)ためを考えて(ep' óphereiéi)私は訪ねます。(eseleusomai)。また(kai)故意の(hekousios)悪意をこめた(ektos) (phthoriés,)いかなる(pasés)不当な仕打(adikiés)、とりわけ(tés te allés kai)自由人たる(eleutherón)と(kai)奴隷たる(doulón)とを問わず(te)、女性たる(gynaíkeíon)と(kai)男性たる(andróíon)とを問わず(te)、その体に(epi sómatón)性行為(aphrodision ergon)を加えることは、断じていたしません(ektos eón)。 (7)また(d')何であれ(an)治療に際して(en therapeíei)見たり(é idó)聞いたり(é akousó)すること(ha)、あるいは(é)治療時以外(aneu therapeíeis)であっても(kai)、人びとの(anthrópón)生活に関して(kata bion)、決して(pote)外で(exó)しゃべり散らす(eklaleesthai)べきではない(mé chre)こと(ha)は、そのようなことを(ta toíauta)口をつむぐべきこと(arreta)と心得て(hégeumenos)、沈黙を守ります(sigésomai)

C. さて(oun)私がこの(tonde)誓いを(horkon)完全に(epitelea)実行し(poieonti)て(kai)破ることがない場合には(mé xyncheonti)どうか私がいつまでも(es ton aiei chronon)あらゆる(pasin)人びと(anthropois)の間で(para)称賛され(doxazomenói)私の生き方と(kai bion)技術との(kai technés)総りの喜び(epaurasthai)をお与え下さい(moi eíe)、しかし(de)これらを犯し(parabainonti)また(kai)誓いにそむく場合は(epiorkounti)これらとは(touteón)逆のことがらを(tanantia)[お与え下さい]

5. 語釈・語学的注

(各項末典拠略号については本稿末文献表を参照のこと、辞書のs.v.は当該語見出し、註釈のad.loc.はその書の当該項を示す)

○「誓い」(HORKOS)：真実を語り、約束を守ることを確認するために、自分たちをすみずみまで監視監督すると考えられた、聖なるもの、王、裁判官の前で、誠心誠意当事者が語る言葉。ことに古代では、人の前ではなく、全知全能の神の前で、真心から出る宣誓が求めら

れた。

A.

○私は誓約します。(omnymi)：この動詞は対格(……にかけて)と未来不定法(……することを)をとることが標準であるが、のちには現在形やアオリスト形を用いて、現在や過去のことを証言するにも用いられた(スマイス⁴⁾ §1863.f)。またこの語は omnyo という別形があるが、ó動詞としての変化形はヘレニズム時代に多く用いられたらしい(シュヴィツァー²⁾ I.S.699)。

○医者としてのアポロン：アポロンは知性と文化の代表者として、音楽(殊に堅琴)、医学、弓術、予言、出産の神でもあり、法律、道徳、哲学の保護者でもあった。このようなアポロンの多面的能力のうち、特に「医神」としての側面が、この誓いで言及されている。

○アスクレピオス：ホメロスでは軍医マカオンの父だが(『イリアス』2.731その他)、ピンダロス(『ピュティア讃歌』3)などではアポロンとラピテス族プレギュアスの娘コロニスの子とされる。

○ヒュゲイア：「健康」(hygieia)の神格化、アスクレピオスの娘とされる。

○バナケイア：「あらゆるもののいやし手」の意。前項の姉妹。(プリニウス『自然誌』25,30その他)。以上からも分かるように、医学の神々は三代にわたる世襲的つながりをもって考えられている。

○証人(historas)：元来は「法と道理をよくわきまえた人」。「証人」はヘレニズム的用法(L S J⁶⁾ s.v.)古典期にはmartyrasのほうが多く用いられた。

○誓約簡条書き(xyngraphen)：宗教教団、同業者団に入会する際に求められた、申し合わせ付きの誓約書。xyn-という綴りはイオニア形。アッテッカ古典形ではsyn-。以下同様。

○肉親(geneteisin)：元来は「生みの親」。擬古典的表現か。アッテッカ方言ではgoneusin。

○心得ます(hegesasthai)：アオリスト不定形。「誓う」動詞は未来不定形を受けるのが本来で、hegesesthaiとなるべきところ。後期的用法か。以下類例が多い。

○私の(emoisi)：古典形ではemois。-iは強調形。さらに加音-nを加えることがある。以下類例が多い。

○この方に(autou)：outeou(L)は古形。ho autos(同一人)の別音形とともとれる (スマイス⁴⁾ §68D)。

○男きようだいたち(adelphois arresi)：男女両性を含めた複数形はadelphoiで代表したので、特にarresi

(男性の)をつけ加えて区別したか。いささかぎこちない表現。擬古典的形の一種か。

○重んじます(epikrinein)：元来は「きめる」「決定する」。「重んじる」(distinguish, esteem)はヘレニズムの用法(L S J⁶⁾ s.v.)アッティカ古典形ではapokrineinというところ。-eeinは古形。

○場合にはいつでも(én)：接続詞。hénという異説では「この技術」(tautén tén technén)を先行詞とした関係代名詞となり、「彼らが学ぶことを求めるこの技術を、術画や誓約簡條なしで……」と続く。

○心得(parangeliés)：元来は「命令」。「一連のきまり」(instruction, <precept, advice)の意味になったのはアリストテレス以後の用法とされる(L S J⁶⁾ s.v.)「すすめ」の意味にはparaklesisが一般的。

○講義(akroesios)：-ios(属格単数形)は新イオニア方言形。元来は「聴くこと」。「聴かれたこと」「講義」の意味になったのはヘレニズム時代。

○知識(mathesios)：形は同前。元来は「知識の習得」「学習」

○上掲三項についてジョーンズ³⁾(P.9)曰く「第一は、『医師の心得』にあるような、医師としてわきまえておくべき一般的心得、第二はメンバーだけに施される口頭の授業、第三は施術中の実習指導」。しかしこのように明晰に区別されるかには疑問もある。

○きまりによって(nomói ietrikói)：「よって」は「従って」とも訳せるか、次の「誓わしめられた」(horkismenois)という完了受動(分詞)の形に伴う行為者(agent)をとる法が文法的に正確であろう。(スマイス⁴⁾ §1488)。

○「誓わしめられた」：原形horkizóはhorkóóのヘレニズム形、受動ではto be sworn(L S J⁶⁾ s.v.)。

B. この部分は医療本来の領域での誓約簡條書き。その言及は、食物、薬物、外科手術の各分野に及んでいる。そしてその間に、宗教的心術、倫理的生活、患者の心身への配慮の言及が点綴される。

○「ためになるようにと」(ep' ópheleíei)：「利益をはかって」。-eはイオニア形語尾、アッティカ古典形は-ai。

○食養生法(diaitémasi)：原形diaitema, 元来は「食事」、複数形で「食養生」「食餌療法」。古注には、「薬を飲んだり、軟膏を塗ったり、膏薬を貼ったりすることの助けとして」これが挙げられているが(リッ

トレ版, ad. loc.)『古来の医術』や『急病の養生法』などに見られるように、食餌療法を医学の中心にしたヒポクラテスの考え方からすれば適切な注とは思われない。

○健康に有害……となる(epi délesi)：元来は「損害、障害、毒」。なお“injury of health”(L S J⁶⁾ s.v.)。

○不正となる(adikiéi)：語尾については「ためになるようにと」の項参照。

○慎しみます(eirxein)：元来は「閉め出す」。なおこの不定法はリットレ(ad. loc.)のいうようにeirxo(もしくはou chrésomai)と定動詞未来に直すべきであろう。今はこのような写本がないため、そのままにしておく。

○誰にも(oudení)決して(oude)……与えません(ou dósó)：複合否定詞の繰返しは否定的表現の強調(スマイス⁴⁾ §2761)。

○有害な(phthorion)：(pessosと共に)destructive, esp. of means to produce abortion(L S J⁶⁾ s.v.)。むろんその際にも、医学的判断により、母体の生命維持上不可避と考えられた際などにはその限りでなかった。

○純潔に(hagnós)……敬虔に(hosiós)……保ち続けます(diatérésó)：神の前に立つにふさわしい汚れない、つつしみ深さを守り続ける。いずれも宗教的用語。

○結石病患者(lithíontas)：lithionはlithos(石)の指小辞、結石(膀胱内に生ずる石状の固形物)。ここからlithio(結石病を患う)という動詞が考えられ、本文の形は、その現在分詞男性複数形対格と考えられるが、この動詞形はL S J⁶⁾には見当たらない。

○そのためか、リットレ(ad. loc.)はこの話の代りにaiteontas(要求している人びと)と読み、道徳問題の脈路から、去勢手術などの要求に応じないの意味にとることを提案している。しかしそれではこの文章後半がしっかり理解できなくなろう。専門職人に非倫理的なことをやらせる、ということになるからだ。むしろアンドレー¹⁾(P.50)の言うように、当時の医者にとってこの手術のみが、他の専門職に委せるべき唯一の(例外的な)ものとした方がよいかも知れない。ここではその意味にもとれるように訳してみたが、なお考えるべき余地はありそうである。

○その仕事の専門職：当時すでに、後のガレノス(1.

125)lithotomos(surgeon who cuts for the stone, L S J⁶⁾ s.v.)がいたと思われる。ケルスス(7.26)にはアレクサンドリアのアンモニウスなる者が截石術を発明したとの記事がある。ちなみにヘロドトス(2.84)はエジプトでは医術が専門的に分化していて、眼の医者、頭の医者、歯の医者、腹部の医者、等々があり、それぞれの医者は一種類のみの病気を扱い、いくつもの病気を扱うことはないことを報じている。

○故意の(hekousios)：こう断ったのは「流れのごとく千変万化移行行く病状を看とる医者は、技術の及ばない不測の事態で、時に心ならずも(akon)、やむをえない処置をすることもありうることを合意している」(古注、リットレ、ad. loc.)

○男性(androíon)：andreionのヘレニズム形。

○性行為(aphrodisión ergón)：アプロディテー(ラテン、Venus)は性愛の女神。その形容詞として用いられたもの。

○治療に際して(en therapeiei)：原語はイオニア方言形、アッティカ古典形ではen therapeíai。ちなみにtherapeiaとは元来は「奉仕」の意。

○しゃべり散らす(eklaleesthai)：元来は「秘密を口外する」。この形はイオニア方言形。アッティカ古典形ではeklaleisthai。

○心得得(hegeumenos)：イオニア方言形。アッティカ古典形ではhegoumenos。

C. 誓いの結びとして「これに叶ったことをなす者にはみずからの身に祝福あれ、これに反した者には呪いあれ」との祈りは、よくつけ加えられる(古注、リットレ⁵⁾ ad. loc.)

○いつまでも(es ton aiei chronon)：直訳「永遠の時に至るまで」aiei(永遠の)はイオニア方言形。アッティカ古典形ではaei。

○総りの喜び(epaurasthai)：直訳「結実を享受すること」(動詞の不定法)。

○お与え下さい(moi eié)：eiéは「ある」の希求法三人称単数現在、これのみもしくは不定法のみで希求を表わす(スマイス⁴⁾ § 2014)のに、両者が重なって出るのは古典的感覚からみれば異様な用法であるが、古風さを表すための擬古典的工夫としてヘレニズム期に現れたが次第に稀になりつつあった(シュヴィツァー、II, 337sq.)

○誓いにそむく場合には(epiorkounti)：アッティ

カ方言でよくある約音形。イオニア方言ではしばしば約音せずepiorkeontiとなり、このほうがこの本文では多くみられるが、このような不統一の書き方が、むしろ古形を残しているかとも思われる。類例、Cの部分では、「実行し」(poieonti, アッティカ形poionti)。

6. 用語・文体の特色

上にみたところからも分かるように、この文書の用語の中には、古い形のものがあり、またイオニア方言の形が随所に用いられている。これはヒポクラテスとその学派の活動地が、コス島を中心とした小アジア、イオニア沿岸およびその近くの島々であり、やがて地中海世界全域に拡がって行ったことを考えれば、当然のことと思われる。

しかし同時に注目すべきは、そこで採用されている言葉の意味が、アッティカ古典期よりもはるかに時代の下る、ヘレニズム期に用いられたものであることで、この点からみて、この文書が、すくなくともその現在の形においては、ヘレニズム・ローマ期に通用したものであることを思わせるに十分である。

当時ギリシア語はコイナー・ギリシア語といわれて、世界語ともいうべき地位を占め、アッティカ方言を基礎としながら、各地域の方言を自由に残していた点から、イオニア方言が多く残っていることは理解できるし、ホメロスにさかのぼる古語が用いられていることも、次のべる文体的特徴からみて、弁論家が時として好んで用いる擬古典的表現によったと考えれば、不思議ではない。

この文書の文体は均一ではない。冒頭の部分(A)は99語からなる長文で、荘重な叙事詩ふうの文体でなる。さきにものべたように、主文を「私は誓約します」という定動詞で始めたのちは、その内容をアオリスト不定法で作られる六つの名詞節によって表わす重複文(Complex Sentence)で、誓いの文章にふさわしい重なりをもっている。

これに対して、それら続く第二の部分(B)は七つの文章からなるが、概して未来形定動詞を中心とした単一文(Simple sentence)による即物的なのべ方で、少くとも文体的には、明晰判明、いかにも科学者らしい文章である。

最後の部分(C)は、特に長文ではないが、希求法の

定動詞「お与え下さい」(eie)を中心としながら、「私に」(moi)にかかる分詞を重ねた重複文で、祈願にふさわしい荘重な文体でなる。この点、最初の部分(A)と照応して、文章をしめくくっている。

このようにみえてくると、この文章はヒポクラテス文書の中でも特殊な類型に属すると思われる。そこに表される宗教的雰囲気、そこに示された同族的団体観などはやがて検討を要するとしても、当時の地中海世界に珍しくはなかったであろう同業者集団の誓約の類型に入るのではないか。しかしこれを一読しただけでも感得される、医術への尊重と高邁な倫理的想念は、それだけでもこの文書を不朽のものとしていることは疑いない。

(この項終)

文 献

- 1) アンドレー : M. Andreae, Programme, Paris, 1843.
- 2) シュヴィツァー : E. Schwyzer, Griechische Grammatik, 3Bde, München, 1948.
- 3) ジョーンズ : W. H. S. Jones, The Doctor's Oath, Cambridge, 1924.
- 4) スマイス : H. W. Smyth, Greek Grammar, Cambridge, Harvard U. P., 1920.
- 5) リットレ : E. Littré ed., Oeuvres complètes d' Hippocrate, 10 Vol., Paris, 1839-61.
- 6) L S J : H. G. Liddell, R. Scott, H. S. Jones, A Greek English Lexicon, Oxford, 1940.

Abstract

Looking into the Hippocratic Oath (1)

Shigeru KAWADA

How to read the Hippocratic oath in our present context? To approach this question, we first tried to provide the reliable textual evidence in reference to the transmission of the manuscripts and their editions. Then we tried to give our word-for-word translation with some grammatical and exegetical comments. Finally we tried to sum up some remarkable points on the diction and literary style of this document and suggest its date of circulation.

Department of Philosophy and Ethics